

詠む広場

毎日俳壇

井上 康明 選

片山由美子 選

小川 軽舟 選

西村 和子 選

影となり炎天ありく兄妹

小平市 中澤 清

△評▽野坂昭如著『火垂るの墓』
の清太と節子を連想した。焼け跡
で餓死した2人のような兄妹が、
今も炎天をさまよっている。

八月や防空壕出て八十年

佐倉市 松戸 文彦

△評▽80年、さまざまの変遷があ
ったが、8月は、防空壕を出て出
合った8月のままである。

空蟬や銃が国家でありし頃

東京 吉田かず也

紙魚走り出づ軍服の写真集

周南市 九内 千沙

村田銃担ぎ行軍炎天下

岡山市 三好 泥子

色褪せし「ヒロシマ・ノート」原爆忌

高松市 島田 章平

夜桜に空襲語る隅田川

坂戸市 戸田 九作

戦火のいのち夏蝶の翅閉ぢて

甲府市 清水 輝子

炎昼や平和を願ふデモの列

相模原市 はやし 央

浮いて来い両手で沈めろる平和

福岡市 三十田 燦

記憶とはうすれゆくものひめゆり忌

高松市 島田 章平

△評▽毎年6月18日に沖縄県糸満
市のひめゆりの塔では慰霊祭が行
われるが、悲しみの歴史の記憶さ
え薄れていくのをとめられない。

八月や戦艦眠る海の底

倉敷市 中路 修平

△評▽沈没した戦艦の姿を映像で
確認できる時代になった。テレビ
の特集番組なども貴重な8月。

沖縄慰霊海をあとと風ぎにけり

大阪市 隠樹ノリエ

戦争を語るめ父や蟬時雨

真岡市 小川 充

戦争のこと語りたる団扇かな

出雲市 石原 清司

原爆忌ベクトボルの水を飲む

東久留米市 矢作 輝

黒南風や旧弾薬庫残る島

和歌山市 武友 朋子

高射砲陣地の残る草いさめ

沼津市 川井大次郎

戦無き夏洋上の雲真白

鹿児島市 平川 玲子

あさがほを数ふる朝の平和かな

嘉麻市 堺 成美

八十年終戦記念日保ちけり

神戸市 中林 照明

△評▽「戦争・平和」特集に平和
を謳歌する投句はなかった。終戦
を終戦のまま80年保てたことだけ
が平和のよりどころだ。

虚無的な平和国家の盆踊り

我孫子市 中山 京子

△評▽世界情勢を見渡せば「平和
国家」がそろそろしく響く。若い
反省が込められている。

八月の空果てしなくがらんどう

池田市 大北ゆきえ

海は夜、最も深く敗戦忌

熊本市 夏風かをる

秒針のきらりと正午終戦日

仙台市 古谷 隆男

誰よりも長き黙禱終戦日

真岡市 小川 充

一片の骨も遺さず終戦日

明石市 島谷喜代孝

遺骨まだ見つからぬまま花梯格

さぬき市 景山 典子

赤紙の一枚紛れ曝書かな

金沢市 岩本 卓夫

語り部は少年少女沖縄忌

始良市 井之川健児

人々の努力八十年の汗

下関市 佐藤よし子

△評▽テーマがあつてこそ生きる
句。今の日常は人々が戦後流した
汗の結晶である。97歳の作者の実
感がこもっている。

いつまでも戦後であれよ敗戦日

倉敷市 行本 章允

△評▽敗戦を受け入れ、平和が続
くようにという願いが、命令形に
よって切実な祈りとなった。

短冊に不戦と墨書星まつり

大阪市 辻井 康祐

文机に正座してをり終戦日

富士宮市 望月志津子

八月や記憶を語る母も逝き

葛城市 山本 栄子

戦死者に国境のなき火花かな

新潟市 細島 正志

蜘蛛の糸平和はいつも揺れてゐる

桑名市 中村 穂

父の日や戦死といふ語蘇る

常陸大宮市 笹沼 實

峰雲や吾子連れ出し空襲展

東久留米市 夏目あたる

慰霊の日ハイビスカスの色濃かり

松山市 井上 保子

<歌集>

新刊

<句集>

◇片山由美子『水柿』 毎日俳壇選者および俳人協会新会長による第7句集。師の鷹羽狩行に教わったことで「最も大切なのは俳句の格調」(あとがき)とし、それにかた作品が収められている。△露(つゆ)けしや鍵に公私のあることも△／＼するがねもくがねも玉も節(せち)料理△大いなる鳥の飛び立つ青風△。その一方で、かすかに不穏なる雰囲気のある句も見られた。△無防備の背中の囁く炎火(たきび)かな△水槽に死に近きもの台風△。

特筆すべき点のひとつは、世界情勢を踏まえた作品が違和感なく収められていることである。△年送る武器の名いくつ覚えしや△。ロシアのウクライナ侵攻で多くの俳句愛好者が詠んだ句のほとんどは報道をなぞるものに終わったが、この句はあくまでも自身に引き付け、終わらぬ戦争を淡々と描いた。伊藤若冲の絵に触発された「動植絨絵(どうしょくじょうえ)」の章という、新境地をひらいた一冊。(ふらんす堂・3080円) (俳人・樺未知子)

◇坂井修一『鵜外の聲(いらか)』 東京大で教授職の定年を迎えて特任教授となった著者の第13歌集。定年の頃にかかった病も完治して「科学と文学」その両方に存在感を示す。△なぜわが鵜外文庫のあるじかと問ふこゑもなし真昼真空△／＼にんげんは銃もたば撃つウィルスをもたばよそびと滅ぼすならむ△(短歌研究社・3300円)

◇恒成美代子『彼方(かなた)へ』 夫亡き後の5年間の日々を記した第10歌集。どのように生きていけばいいのからに問いかけた心の軌跡である。△核兵器搭載ミサイルいつか飛ぶ予兆の朝の夢を削除す△(角川書店・2860円)

◇玉城洋子『炎昼(マフックワ)』 辺野古叙事詩。沖縄戦で10万余の住民が犠牲となった。著者は「沖縄人」として辺野古の自然と暮らしを守ろうという信念を持って長く辺野古を詠み続けている。第8歌集。△辺野古の海二見の山に囲まれ聞く沖縄戦の真相語り△(コルサック社・2200円) (歌人・中川和子)

戦後80年「戦争・平和」特集